第530号 平成元年 8 月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年 8 月31日 第三種郵便物認可

1989年（平成元年）
8月号（No. 530）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目　次

追悼―槇有恒氏―……山田二郎…（1）
槇有恒氏の日本山岳会葬
岡沢祐吉……（2）
槇さんの御葬儀のいきさつ
村木潤次郎……（3）
「日本の山岳標高」の発表について
……（4）
海外の山……（4）
第20回『山岳図書を語る夕べ』…（5）
第17回山岳史懇談会……（6）
女性会員懇親山行・伊吹山……（6）
会員アンケート結果報告(2)……（7）
熊本支部総会報告……（8）
静岡支部平成元年度総会開催報告
……（8）
自然保護委講演会……（9）
第43回ウエストン祭……（9）
タンボチェ僧院再建協力
のお願い……（10）
図書紹介……（10）
「マンモスとの山旅」
「THE HIMALAYAN JOURNAL」
東西南北……（11）
会務報告……（12）
新入会員・住所変更……（13）
お知らせ……（14）

▶日本山岳会事務取扱時間
月，火，木，土曜　10時～20時
水，金曜　13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

お知らせテープ電話
234六六五九

追悼―槇有恒氏―

山田二郎

私が初めて槇さんにお目にかかった（と言うよりお姿に接したと言う方が適当かも知れない）のは昭和十五年秋に催された慶応山岳部創立二十五周年の会合であった。

当時、入部早々の若輩の私が直接お話しする機会などなく、印象に残ったのは独特のしわがれ声でされたスピーチと、槇さんの極く近くに席をとられた三田さんのお二人が想像して居た偉丈夫ではなく、何れも小柄でしかも何処か似た風貌に見え、しばらくはお二人の区別がつかず困ったことぐらいであった。

その日の槇さんの温和な語り口からは、これがアイガー東山稜の初登攀者、アルバータ初登頂隊の隊長であり、また松尾峠の猛吹雪の中を生き残った大先達をイメージすることは困難であった。

その後も現役の学生と槇さんとでは距離があり過ぎてお話を直接する機会はなかったが、戦争たけなわとなった昭和十七年夏、山岳部のチーフとなって部の運営について思い悩むことの多かった私は、或る日意を決して横浜の槇邸にご相談にうかがったことがあった。時局の動きと山岳部の在り方について私なりに何か意見を申し述べたのだが、多分それは経験豊かな槇さんからは青くさい未熟なものであった筈であったが、黙ってお聞き頂いた最後に「創立以来我々のルームの運営はデモクラティックにを柱として来ました。部は強く回転する独楽のようなものです。時代と共に中心の位置は変っても、それを軸に部全体が独楽のように力強く回転を続けて居ればそれが部の伝統となって続いて行くのです」と言われたのが強い印象であった。

学徒動員から復員して山岳部に戻った私は二十一年の秋、槇さんのお伴をして穂高―槍の縦走をする好運に恵まれた。槇さん達がアルバータ遠征の折、現地の大学生として世話役をしたN・M・カーター氏がGHQの嘱託として来日中で、当時大町に疎開中の槇さんに「日本アルプスを登りたい」ということで依頼があり、たまたま秋山を終えて上高地に戻っていた私達に同行のお誘いがあった。食料は豪華な米軍のレーションだそうだとの話にもっけの幸いとばかり大歳君と私の両名は早速和製シェルパ役を申し出た次第であった。この縦走は好天にも恵まれ楽しいものであったが同時に大先輩との山行は言わず語らずのうちに槇さんの称えられた重装主義の何たるかを体得させて頂く意義深いものとなった。

卒業後はまた「山の槇さん」ではなく、佐倉飼料(株)の従業員として「社長の槇さん」から貴重な経験をさせて頂いた。取引銀行の支店長との会食に陪席させて頂いた時のことだが、同席していた銀行の担当者がした不用意な発言に対し、槇さんは厳しくたしなめられたことがあった。当時取引銀行の機嫌をそこねることは会社の運営にとって重大なことで、並みの経営者ならばご無理ごもっともと言うところだろうが、さすが、槇さんだと驚いたり尊敬の念を新らたにしたものであった。

主賓の支店長も「流石に槇さん、有難いご忠告を頂いて……」と言うことでその後の取引も一層親密の度が加わった。

槇さんは外柔内剛といおうか、お人柄だけあって、ご自分の主義主張を生生しく外に現わされることは滅多になかったが重要な節目としては断乎としてご自分の主張を貫かれる強い一面をうかがうことが出来た。そうしたとき、普段の温顔に油断して居る我々は極めてこわい槇さんの一面に接し、あらためて身を引き締めたものであった。或る年の登高会の席上、会計の担当理事から「会費の納入率が頗る芳しくない、何年か会費を滞納した者は会員から外すべきではないか」と提案したところ、槇さんの雷が落ちた。「登高会はそういう会ではありません!!」私など会計幹事の考えに何となく同調して居た者達は頭から冷水をあびせられたようなショックであった。おかげ?で会費納入率は今もって日本山岳会などに比べ驚くべき低率であるが、それはそれで結構楽しく運営されているのだから不思議と言えば不思議なものだ。

マナスル後、槇さんが茅ケ崎にお住みになるようになってからも私の会社が小田原に工場を持っていることもあって、度々お邪魔させて頂いた。不意にお訪ねしても、いつもにこやかに迎えて頂き、山の話、世間の話、会社のことなどいろいろと話題は多岐であったが、その何れをとっても槇さんとの話は世に言う老人との話ではなく、山の話は極く近いOBや学生達と話をしているのと違わないフレッシュな、また時に真剣なものであった。世間一般の話も、その時々の時代の流れ、政治、経済、物の考え方なども時代、世代のズレを感ずるようなものでなく、時として遥か若輩の私などより一層進んだ見方、考え方をして居られるのには何時も驚かされ、啓発されることが多かった。

今はもうあの楽しくもあり、また教えられることの度々であったお話を聞くすべもない。

山登りが益々多種多様化する中で課題の多い日本山岳会をお引きうけすることとなった今日、あの貴重なご意見、ご見解を今こそうけたまわりたかったのにと思う今日この頃である。

謹んでご冥福をお祈り申し上げる次第。

槇　有恒氏の日本山岳会葬

偉業を偲び多数の参列者

平成元年五月十七日（水）午後一時より、日本山岳会元会長・槇有恒名誉会員の葬儀および告別式が、東京新宿区南元町十九、千日谷会堂において、日本山岳会葬として、本会、（社）日本山岳協会、登高会により執り行なわれた。当日は雨降りという生憎の天気であったが、全国各地より大勢の参列者があり、たくさんの白い菊の花に囲まれた生前の故槇有恒元会長の遺影も、終始なごやかであったように見受けられた。

葬儀は定刻どおり、三人の導師による読経で始まる。

続く弔詞は、先ず槇元会長が名誉市民であった仙台市の石井市長の弔詞を藤堂仙台市助役が代読し、仙台市周辺の山々とともに育まれた槇氏の面影を偲んだ。続く登高会会長の谷口現吉氏は、登高会創立のころの槇氏を偲び、後輩として学び伝えるべきその意志を探り、日本山岳協会々長鎌田久氏は、共に務めた日山協での仕事を通し、受けた叱正とその恩情に思いを馳せ、本会々長（当時）の今西壽雄名誉会員は、登山界の特筆すべき指導者との長い別離を惜しんだ。

弔電はアイガー初登攀のときの唯一の生き残り、サムエル・ブラヴァント氏、スイス山岳会会長のシュタインエッカー氏、世界山岳連合（UIAA）会長・役員一同、アメリカ山岳会、アパラチヤ山岳会。国内では故人と私的公的にかかわりのあった三田幸夫氏、唐招提寺長老、文部省体育局長など各界の友人知人から多数あった。

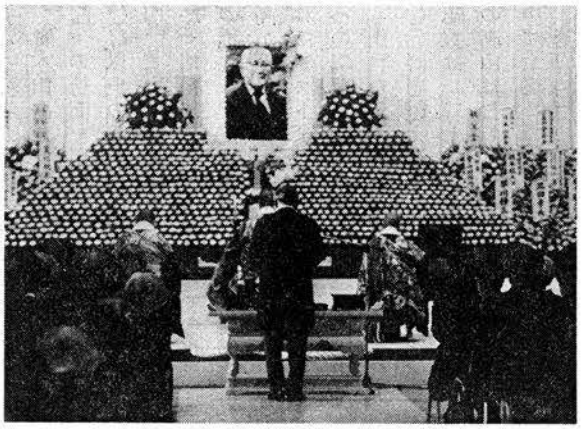
続いて導師による読経のなか、指名を受けた人々が、葬儀委員長の今西会長、喪主・槇恒治氏のうしろに夫ぞれ二手に分かれて次々と焼香し、最後のお別れをした。仙台市助役、文部省登山研修所長、日山協会長、慶大山岳部長、登高会代表、日本山岳会名誉会員など。

葬儀は二時少し前に終了し、午後二時からの告別式は、祭壇両脇に葬儀委員長と本会名誉会員、喪主および遺族が並び、導師による読経の行なわれるなか、多勢の一般会葬者が焼香し最後のお別れをした。

なお、葬儀・告別式のあいだに、本会々員で慶応の後輩にも当る橋本龍太郎議員が公務多忙のなか焼香した。

会葬者の焼香が終り、今西壽雄葬儀委員長から参列者にお礼の挨拶があり、登高会の人々の献歌が行なわれた。

遺骨、位牌退場にあたり、当日の葬



槇　有恒氏の日本山岳会葬・弔詞を読む今西会長

槇さんの御葬儀のいきさつ

五月十七日、槇さんの日本山岳会会葬を行った。槇さんを御送りするのに十分ふさわしいものであったとはいえないかも知れないが、多くの方々の御力添えを得て、どうやら礼を失せざる程度に式を終ることができた。御遺族に対する報告も終り、会計の整理も一段落したので、当時のいきさつを記して会員の皆様に対する御報告と御礼に替えたい。

五月二日の夕方、村木が辰沼広吉氏をお訪ねしている時、計らずも槇さんの訃報に接した。直ちに山岳会に連絡、偶然ルームにおられた大塚副会長と相談の上、新聞関係への連絡は大塚が当り、村木は登高会太田氏と協議しつつ連絡掛を勤めることになった。当初は槇家と登高会の方々の御考えに従って、御自宅の密葬には日本山岳会はあまり出しゃばらず、東京で行われる本葬にはできる限り御手伝いすることとした。さらにその後若干の推移があって日本山岳会としては始めにして終りともいうべき会葬を挙行することになった。これは槇さんが日本に近代登山をもたらされた最大の功績者であり、アイガー東山稜、アルバータ峰初登頂の後、戦後一九五六年には第三次マナスル登山隊を率いて、当時、僅かに残された八〇〇〇㍍峰ジャイアンツの一角に登頂の記録を印された偉大なリーダーであったということは勿論であるが、その謙虚なお人柄に対する今西寿雄会長始め多くの会員の敬愛の念に基づくものであったことは言う迄もない。

以下、会葬挙行迄の過程を日を追って記しておく。

五月二日　午後五時二分逝去
五月三日　槇家通夜
五月四日　槇家密葬　一部会員は参列
五月六日　今西会長より会葬挙行の提案あり
五月七日　村木、太田氏と協議、槇家の御了解を得て日本山岳会会葬として準備に入る
五月八日　日本山岳会常務理事会開催、会葬の準備協議
五月十日　日本山岳会理事会において会葬の件、正式承認
五月十一日　槇家、登高会、日本山岳会関係者間で葬儀内容打合せ
（午後一時）
出席者　槇家・恒治氏、小方全弘氏
登高会・太田氏、宮下氏、山岳会・今西、大塚、村木、鴫原、松田、西村　計十二名
葬儀社・二名
五月十二日　朝日、毎日、読売の三紙、関東全域朝刊に葬儀通知を掲載
五月十六日　日本山岳会側、準備打合せ
出席者　石橋、入沢、岡沢、関塚、鴫原、早川、松田、村木
登高会・宮下、山田　計十名
五月十七日　千日谷会堂にて会葬挙行
六月十七日　多磨墓地にて納骨、今西葬儀委員長より葬儀報告書を槇恒治氏に呈出

以上で、槇さんの本会会葬に関わる行事は総て終了した訳であるが、挙行迄の諸準備、実行に当っては会の総務、集会、婦人部始め各委員会の方々、また会員会協力者、登高会関係の学生たちも含め、喪主の槇恒治氏からお礼の挨拶があり、さらに同氏は故人が山を通して一つの人生観を持っていたこと、そして山を介して多くの友人を持っていたことの二点で、故人は恵まれていたと付け加えた。

なお会葬者には挨拶状のほか「御礼」として「ナイケ・コルの前進基地で指揮をとる槇隊長」「マナスル会に出席されたときの槇隊長」他三枚の絵ハガキが手渡された。

（文・岡沢祐吉　写真・大森弘一郎）

今年もさんけんで会いましょう

た、登高会、日本山岳協会の方々には言葉に尽せぬ御世話になった。また、会計の後始末については会の事務局特に杉山さんには御苦労をかけたことを御詫びして、この報告の終りとしたい。

（村木潤次郎記）

「日本の山岳標高」の発表について

国土地理院は本年より六月三日を「測量の日」と制定し、それを記念していくつかの行事を行った。その中で我々にとって関心が高いのは、従来用いられていた山の高さ（標高数字）とは異なる数字が公表されたことである。

日本山岳会は昭和の初期より『山日記』の誌面を用いて「日本の山一六〇〇㍍以上の各地の山」や「日本三百名山」また「難読山名」などを永年にわたって掲載し、改訂を加えてきた。この種のリストは類例がなく利用価値が高かった。今回国土地理院より発表されたリストは、国土基本図であるところの二万五〇〇〇分の一地形図上で「山」を示す表記がされ、標高が二五〇〇㍍を越えるものに限定されたが、総数は二二七山となり、日本アルプスの高山はこのリストの中にほぼ網羅されている。

『山日記』で用いた標高数字の根拠

海外の山

草原と山

モンゴル人民共和国で、もちろん仕事でだが、この夏も一カ月をすごしている。長い間、日本人には遠い存在だったモンゴルの山も、この一、二年、急速に身近なものになった。

七月には田部井淳子隊長以下五人の日本女性登山隊が、初めてモンゴルの女性たちとモンゴル・アルタイ山脈のツルゲン山群ツァガンデグリ（4200㍍）に合同登山を試み、全員登頂を果たして帰国した。みやげばなしによれば、花の咲き乱れる大草原、標高に似あわないような立派な氷河、そして陽気な岳人が印象的な旅だったようだ。

最近、一部の旅行会社では、ネパール、中国並みに、十日前後の短期グループ登山を企画、募集を始めてもいる。新しい山の世界が開けつつある。

――――――

オトコンテンゲル山に登ったのは、一九八七年夏だった。ウランバートルの西部、ザブハン・アイマク（県）を訪ねた際、アイマクの幹部にお願いして立ち寄らせてもらったのだ。

八月も半ばを過ぎていたが、富士山のようにどっしりすわったこの独立峰のてっぺんは万年雪に覆われていた。軽登山靴をはいただけの、ピッケルもない軽装だったため、雪線を越え、頂上直下の急斜面にでたところでそれ以上登るのをあきらめたが、持参の高度計では、四千㍍に百㍍ほど足りない感じだった。はるか眼下に、牧民たちのハシャー（牧舎）や、雪解け水を集めた小川が見わたせる、眺望の良さが心に残る山だった。

その日は標高3千㍍の牧舎の前にテントを張った。あたりの草原にところどころ、白いものが円状に生えている。モーグと呼ばれるきのこで、これがうまい。羊肉とうどん（モンゴル人は麺類をよく食べる）の鍋に加えると、独特の風味と噛みごたえがある。

時折、草原のあちこちで、地面の穴からモルモットのような動物、タルバガンが顔を出す。八月十五日の猟解禁日の後だったため、夕食にはモーグに加えてこのタルバガンの肉にもありつけることになった。塩を少し入れてただぐつぐつ煮るだけのものだが、食べると身体があたたまるのがいい。夜の冷え込みはかなりのものである。

眺望と珍味に恵まれて、モンゴルの山の一日は、楽しいものだった。このような地域での山登りは、山麓の人人の生活に触れてこそ味わい深いものといえるだろう。

が、このように、新しい山域が開放されるたび思うのは、どうかこの自然の美しさ、人々の暮らしのおだやかさが「開放」によって損なわれませんように、ということだ。

いささか矛盾するようなことだが、次々に新しい山域が開かれ、強い円を持った私達の行動半径が広がってゆく今日このごろ、つねにそのことは旅行者、特に登山者の念頭にあっていいはずである。

（江本　嘉伸）

◇　◇　◇　◇

は国土地理院の五万分の一地形図から取られたものであるが、数字の表記に関しては縮尺は関係しないことはいうまでもない。二万五〇〇〇分の一地形図では面積が四倍に示され等高線間隔もより細かく表現されることから、山の最高点が地図自身から読みとれるようになった。地図に表記された標高数字は、①三角点　②標高点という測量に必要な地点の標高数値であるが、これらはかならずしも山頂にあるとは限らない。二万五〇〇〇分の一の地形図をながめながら、山頂と、表記された数字の位置が一致しない所を見つけるのは容易であったし、また実際に山に登ってみても三角点の位置より高いと思われる山頂を見つけた経験は少なからずある。今回国土地理院が行ったことは空中写真判読か現地調査により「山頂」の高さを測り、数字を与えたことである（数字は地形図上に表記されないものもある）。従来のリスト（『山日記』のリストも含めて）は、山頂と山頂でない高さとを混在させていたが、今回のリストは、すべてが山頂の高さになっている。次にいくつかの例を具体的に見てみたい。

涸沢岳は従来は三一〇三・一㍍だったが、今回三一一〇㍍に改められた（少数点以下は四捨五入されている）。真の山頂は三角点より一〇〇㍍程北にある。蝶ヶ岳はピークがいくつもあるが、小屋近くの二六七七㍍の標高点が「山頂」と決められた。よく話題にのぼる水晶岳は「高い方」が山頂になり二九八六㍍が与えられている。北薬師岳は山名は表記されているが標高数値の記載がない。リストでは二九〇〇㍍と示された。

地図上の山名は、ごく一部を除き読みを示すルビはふられていない。今回のリストには地名調書からとられた山の呼び方をルビとして付けている。この点に関して、登山者の間では異った呼び方をしているものがある。例えば、悪沢岳は東岳（あずまだけ）とされるが、荒川東岳（あらかわひがしだけ）か東岳「ひがしだけ」と呼ばれるので、「あずまだけ」の根拠は考えられない。今回は備考欄に「一般化している」呼び方を付けていて、我々はようやく安心できる。

このリストに示された数字は山頂の高さとして今後様々な所で生かされることであろう。そして国土地理院では将来にわたって「日本の山岳標高」の見なおしを行うということである。

なお、この資料の巻末には、「山」五二七号にも、武田満子会員が紹介されている様に、今回の標高修正に関連して、各都道府県別の最高標高も一覧表として、まとめ掲載されている。

『日本の山岳標高』という名の小冊子は直接国土地理院に返信用封筒に切手二五〇円を貼って出せば送ってもらえる。

（児玉　茂）

報告

図書委員会主催

第20回『山岳図書を語る夕べ』

（併設「第26回この一本展」）

今年は松方三郎さんの生誕九〇周年にあたります。そこで、今回の「山岳図書を語る夕べ」では、松方さんと親しかった島田巽、田口二郎両名誉会員を講師にお招きして、「松方三郎の山と本」をテーマに語っていただくことにしました。四月八日、開会の午後三時にはルームは出席者でいっぱいになり、会席もいわゆる講演形式でなく、松方さんを敬愛する人々が二人の談話者をかこむかたちで「夕べ」は始まりました。

両講師が時代とテーマに沿って交互に語る松方三郎談義は、はじめのうちは事前に打ち合わせたシナリオを追っていたようです。まずは島田さんが、松方さんの生立ちから学習院での登山、日本山岳会入会（五四七番）、京都大学時代、ロンドン留学までの事績を語り、それを引き継いで田口さんが、往時のスイスにおける登山の諸相を文化史的に語って、『アルプス記』『アルプスと人』の時代論を展開すると、つづいて島田さんが、帰国後の日本山岳会での松方さんの活躍を、虎の門ルーム開設や創立三十周年記念山岳図書展覧会の話を中心に回顧するというふうに、談話はまことにつつがなく進行していたのですが、それもここまで、あとはシナリオ抜きの御両所の談論風発、「夕べ」はにわかに混沌としてきました。

そんなわけで、その中身をまとめるなんて不可能なので、ここは出てきた話をごちゃごちゃに列挙するにとどめます。松方三郎の文章、川上肇門下のマルクス主義者、ブリティッシュ・ミュージアム、アルプスへの思い入れの深さ、日本の即席資本主義に対する痛憤、学習院時代の超一流の師、たとえば鈴木大拙の薫陶、白樺派との関係、若き日の文学的環境（長与善郎や志賀直哉も出てきます）、民芸への情熱、岸田劉生とのかかわり、美を見る眼、松方さんの理知的で闘争的な登山観、どうしてあんなに富士山が好きだったのか、一九七〇年の第二回エベレスト

登山隊長の思い出と、ほぼ二時間半にわたる島田さんと田口さんのお話は、お二人が一流の文筆家であり、かつは劫を経た座談の名手でもあることとて、それはそれは面白くて含蓄に溢れたものでした。

お二人の講師はあれこれと語りながらも、いまだに松方三郎という人物の本質も全体像もつかめないと言われたのが印象的でした。それでも、聴く者は、この万華鏡のような談話が織りなす風景から、偉大な先人の奥深くまばゆい世界を、たしかに想い浮かべることができました。

なお、当日は日本山岳会所蔵の松方三郎の著書を陳列し、図書委員・岩瀬晧祐氏編の『松方三郎主要著作目録』を全出席者に配付しました。

〔出席者・順不同〕望月達夫、河野幾雄、山村正光、菅野弘章、中村太郎、近藤緑、飯田進、高澤英雄、石田喜八、大橋晋、平井吉夫、斉藤健治、安江安宣、太田敬、岡村美邦、近藤信行、平戸孝夫、岩瀬晧祐、大森久雄、松家晋、近藤等、岡野修、石橋正美、鴫原啓佑、中村純二、原謙一、岡沢祐吉、板倉勝正、松田祥二、渡辺兵力、高辻謙輔、三栖寿生、神原達、越田和男、織田沢美知子、武田満子、中村小一郎、岩堀瑞子、加治川栄二、泉久恵、河村栄二、松田雄一、川合周、平井拓雄、小川益男、三好まき子

（平井吉夫記）

第十七回山岳史懇談会
―渡辺兵力氏「谷川岳東面」をめぐって―

図書委員会

三月十七日、本会ルームでひらかれた第十七回山岳史懇談会では、名誉会員渡辺兵力氏のお話をうかがった。演題は「谷川岳東面をめぐって」。昭和四十八年以来、先輩諸氏をお招きして山における足跡を語っていただいたわけだが、今回もまたたいへん有益なものがあった。

一九二一年（大正十年）、七歳のときの富士登山、父君が秩父宮殿下の御用掛をつとめていたことから赤倉のスキー行に参加したこと、二七年の穂高・槍縦走と小槍登攀などから、成蹊高校時代の谷川岳開拓、三五年のチャチャヌプリ、五六年の南極行、六三年のバルトロ・カンリ、八〇年のチョモランマと閲歴を語るなかで、谷川岳が自分にとってどのような役割をもっていたかを力説された。三一年の上越線開通前後の谷川岳を語りながら、一ノ倉沢奥壁その他の登攀をおもいおこしつつ、それがヒマラヤへの道程であったことを回想される。盟友高木正孝氏のこと、また杉本光作氏をはじめとする社会人団体とのちがいを話されたのが印象にのこった。

谷川岳をめぐる回想のなかでもうひとつ重要なのは、三二年九月、成蹊高校が虹芝寮を建設したことである。学校は登山とスキーの価値をみとめて資金を出してくれたが、建設にまつわる準備、交渉から基礎工事など、すべて学生の手でまかなったという。そして保全につとめてきた。山と小舎はわれわれの教師だった、そこから人生万般にわたる多くのものを学んできたという渡辺氏の表情からは、こころのゆとりのある、人間教育の場としての山が感じられた。

〔出席者〕大橋晋　岡村美邦　三栖寿生　近藤信行　中村太郎　松丸秀夫　岡野修　関塚貞亨　菅野弘章　河野幾雄　鴫原一男　細井澄子　鴫原啓佑　岡沢祐吉　松家晋　渡辺正臣　泉久恵　岩瀬晧祐　三好まき子　河野之保　平戸孝夫　近藤緑　大島輝夫　吉田実　川合周

（近藤信行）

女性会員懇親山行
―伊吹山―

婦人懇談会　関西支部
京都支部　共催

今冬は雪が少なく、伊吹山ではスキーができたのはわずか片手で数えるほどという年でしたが、桜も散った四月十五日、琵琶湖のほとりに九州から関東から五十人を越える会員が集り、昼間は渡岸寺や長浜曳山まつりに時を過し、夜は北ビワコホテル「住文」で懇親会を開きました。幼かりし頃当地に過した坂倉登喜子さんの乾杯でにぎやかに幕開け。久々に合わせた顔と昔日の山行や、友人の消息を語り、初対面同士ともうちとけて語らう。友あり遠方より集うというところでしょうか。最後は故西堀栄三郎名誉会員への追悼の心をこめて「雪山讃歌」を合唱、輪になり腕を組んで今日の日よさようならとハミングのうちに閉会しました。

翌朝、昨日来の雨も上り雲はたれこめているものの皆元気よく伊吹山上野登山口へ。当日参加の地元支部の四名と合流。関ケ原からドライブウェイを経て頂上へ向う組、ゴンドラを利用して八〇〇㍍の三合目より歩く組、ふもとからしっかりと登る組（半数以上はこの組だったことを報告します）に分

かれて頂上を目指しました。ニリンソウ、ショウジョウバカマ、夏はさぞやと思われる山道です。霧は濃く木立をぬけてもなかなか展望はきかずこのまま又下るようになるのかと考えているうち、七合目を過ぎるころ、しばらくの間ふりかえると、琵琶湖が見渡せるほどにもなりました。しかし十一時頂上へ着く頃は深い霧の中。三角点もお手洗も霧をかきわけかきわけさがすというような感じで、山頂の暖い小屋のなかで又合流して昼食とお茶。オートバイでふもとまでかけつけ、追いかけて登って来た会員（女性）も加わりました。

ふたたび、しっとりとした山道を下り、五合目で又琵琶湖と対面することができました。

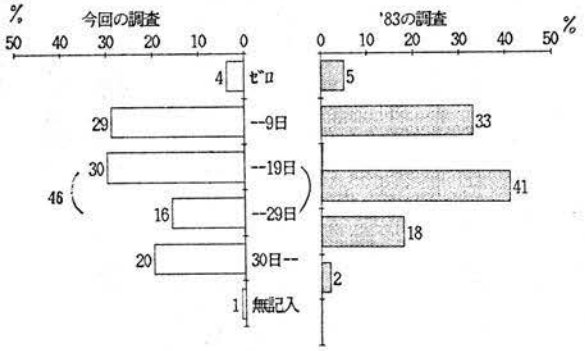
家事や仕事に追われる女性達が山に出かけるのはとても努力のいることで、時にこうして集ることは、とても親近感を覚えます。婦人懇談会は東京を中心に活動しているのですが、それに限定されることなく、その輪を全会員に広げてゆくような行動や行事を、という希望が前夜も聞かれ、支部に負担がかたよらないように計画し、何年かに一度は催してゆくことも意義ありと、反省もこめて最後に考えたことでした。

二時過ぎ上野登山口に集合、散会。

会員アンケート結果報告 (2)

9. 年間登山日数

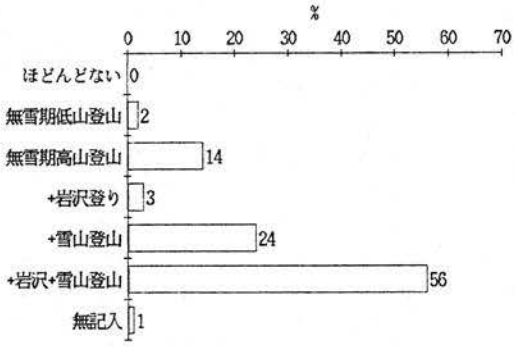
前回と較べると，年間登山日数 10～29 日の会員が5ポイント，30 日以上の ヘビー登山者が2ポイントと，それぞれ増加している。



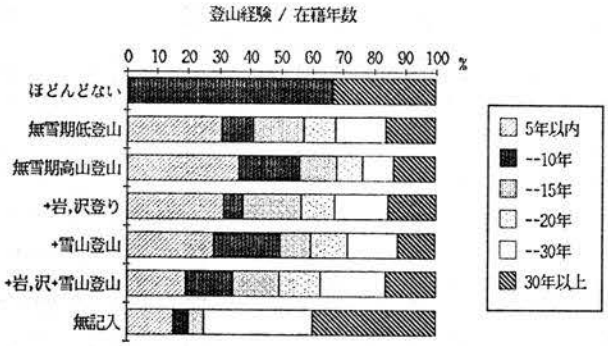
10. 登山体験

無雪期のみの体験者が 19% を占める。

オールラウンドな登山の体験者は 56% を占める。



在籍年数が5年以内の短かい会員は在籍年数のそれ以上の会員に対比し登山経験が少ないことが目立つ。



（文責　西村政晃　作図　小林政志）（次々号へ続く）

参加者五十二名（会員外四人）
（女性三十八名、男性十四名）
（穴田雪江）

熊本支部
総会報告

平成元年度の支部総会は、五月一四日（日）午後二時から、昨年と同様、熊本市のNTT会館会議室で二三名が出席して開催された。

先ず奥野支部長の挨拶のあと本田副支部長を議長に選んで審議に移った。あらかじめ配付された資料に基づいて事務局より提出議案の説明が行なわれるという形で審議は進められた。

昭和六三年度の事業報告、決算報告、会計監査報告はいずれも原案通り、平成元年度の事業計画は次の通り承認された。

○例　会
七月二九日　山の映画会
十月二一日～二二日　白髪岳
一月一三日　新年晩餐会
二月一一日～一二日　冬季例会
日時未定　山の写真展

○支部報の発行
現在、内部で行事記録は配付しているが、とくに支部報といったものは出していない。
支部会員も、この四月で四十名となったので、支部報の発行を行なう。詳細は次期委員会で検討する。

○平成元年度役員
支部長　奥野正亥
副支部長　本田誠也
常務委員　田上敏行　和仁古昇
委員　松本莞爾　菊池更生
川端浩文
監事　馬場猛
顧問　西沢健一

総会終了後、別室で宮崎豊喜会員の古稀祝を兼ねて懇親会を行ない、午後六時、散会した。
（田上敏行記）

静岡支部
平成元年度総会開催報告

当支部では六月十三日静岡市たまがみ神社集会所において支部通常総会を開催した。支部会員総数八十八名中出席者二十一名委任状提出者三十二名。

議長に支部長が選任され、次の通り報告が行われた。ついで議案について審議され承認議決された。

一、昭和六十三年度事業報告
イ、毎月第二土曜日に二土会を開催した。
ロ、支部通信を三回発行した。
ハ、五月には岩岳山登山を行った。
また西郷会員（千坂正郎）の『北八ケ岳の黒い森から』の出版記念会を開催した。
六月は関西支部と交流懇親登山を愛鷹山において実施した。
また同月昭和六十三年度総会が開催された。
十月には水野会員の北満、シベリアツアーの報告会があった。
十一月は平野の民宿に一泊して真富士山の支部懇親山行を行った。
一月には新年会を開催した。
他に『紅葉会』開催についてのアンケート調査実施。また山本前支部長に記念品を贈呈した。

二、昭和六十三年度決算が報告され、承認された。

三、平成元年度事業計画の発表
イ、毎月の定例会合を二土会から火曜会に名称を変更し第二火曜日に開催することとする。
ロ、十一月十一、十二日に愛知県東栄町「清学山荘」において懇親会と山行を実施する。
平成二年一月九日には新年会も開催する。
ハ、支部通信を年四回発行する。
ニ、支部未加入の県内在住会員に支部加入を積極的に呼びかける。
ホ、南アルプス南部の光岳に続く西山稜にある池口岳に営業山小屋建設計画が進行中であるが、その影響を実態調査し日本山岳会として言うべきことがあれば主張する。

四、平成元年度予算案が説明され、承認された。

五、平成元年度支部役員の改選を行い次のとおり決定した。
支部長（再任）安間荘
総務委員（再任）磯野兼二郎
大石淳　永野敏夫〔事務局担当〕
（新任）田辺恵造　坂井八郎
会報委員（再任）西郷正郎
（新任）有元利通　森博
企画委員（再任）石間信夫　鶴見敏彦　杉本宣明　近藤浩之
（新任）水野公男　久保田保雄
会計委員（新任）望月福次　横井孝恵
会計監事（再任）佐野敏郎　萩野恭一

六、その他
イ、支部活動の活性化のため支部役員は七十歳を定年としたらどうかの提案があり、それにたいし高齢化社会の現在いまさら何を言うのかの強い反対論あり。支部規約「顧問制度」の活用と合わせて検討することになった。
ロ、支部会員慶弔制度を作ることについて提案があったが、経費関係

から見送りとなった。

（注、池口岳山小屋問題とは、先般本州山岳地帯としては唯一の「原生環境保全地域」の指定を受けた寸又川源流地帯に容易に入れるようにするために指定地域の縁辺部に営業小屋を建てようとするもので、現在、賛否両論がいりみだれている。日本山岳会の立場はどちらかは自ら決まっていることであろう。）

（西郷正郎）

渡辺兵力氏の講演会

「自然保護考」報告

自然保護委員会

平成元年五月十一日、本会ルームに渡辺兵力氏を招いて自然保護にたいする同氏の考え方を話していただいた。

関塚理事の司会で開会、さっそく渡辺氏のつくられたプログラムにそって話はすすめられた。

Ⅰ、自然の解釈　Ⅱ、環境論の考え方と同氏の学術的定義づけが述べられたのち　Ⅲ、自然保護論の問題点で話は具体的になり「開発と保護の対立・矛盾」「何処の何の自然を保護するのか」「自然保全の提唱」「登山行為の評価」「JACの立場から」で話は結ばれた。

人口増加と生活水準の向上追求が自然の破壊をすすめている原因であり、日本山岳会の自然保護活動は反対運動ではなく一番必要な自然保全運動にこそ力をいれてオリジナリティをだすべきであると述べられた。

講演後、質問時間となり副会長の村木氏をはじめとする数名から発言があり、そのあと少量のアルコールとツマミによる懇親会にはいり、会場のあちこちに、和気アイアイとした小グループによる自然保護論争がくりひろげられた。

自然保護に関心をもったがどのようにとり組んだらよいかわからないので勉強の為に参加された人、参加者自身がしっかりとした自然保護論をもっていて、それを述べたくて参加された人などさまざまであった。

〔参加者〕中保・澤井政信・堀内章雄・山口悠紀子・河野之保・関塚貞亨・松本恒廣・松丸秀夫・村木潤次郎・梨羽時春・河野幾雄・斉藤かつら・鈴木快信・大森久雄・市川義輝・南井英弘・越智英夫・武田満子・麦倉啓・渡辺正臣・遠藤光男・篠崎仁・岡野修・菅野弘章・黒沢秀雄・大島輝夫・池田剛・三枝啓子・穴田雪江・平戸孝夫・渡辺徹・木名瀬亘・横山隆　以上33名

（横山　隆）

第四十三回ウエストン祭報告

信濃支部

今年もウエストン祭が、六月第一土曜、日曜日の三日、四日の両日行われた。今年は第四十三回である。

三日はウエストン師が登った登山道を辿る記念山行の徳本峠越えである。昨年は、前日の大雨で島々渓谷が増水し、危険回避のため中止されたのだが、今年はうって変わり快晴で絶好の登山日和である。

出発時刻の六時前には、島々の登山口には日本山岳会員、一般登山者が多数集まっている。赤羽孝一郎信濃支部長の挨拶のあと、峠越えリーダーの角田啓蔵信濃支部員が、一般登山者に安全登山の留意事項などの説明をし、定刻に出発した。

私は、脱落者確認のため最後部から友人と出発することにした。

新緑が気持ち良く、また、水溜りにはミヤマカラスアゲハなども見られ、深山であることを感じさせる。

岩魚留小屋では主人と二年ぶりの挨拶をし暫く休ませて頂いた。峠への登りの最後の水場あたりでは桂の葉が赤く一センチ位に開いたところで、この辺りは漸く春といったところである。少し登ると猿の群れにも出会った。峠越えで猿に出会ったのは始めてであった。

峠には三時頃到着。西に望む前穂は、例年に比べ雪が多く、残雪の白と岩肌の黒とのコントラストが先程までの景色とがらりと変わり、美しく新鮮である。

下りは、峠直下から雪でびっしり詰まり運動靴の私はすっかり濡れてしまった。

怪我などをした人もなく、本部のある上高地温泉ホテルには六時頃到着し、無事峠越えが終了した。

ホテルでは、明日の碑前祭の準備打合せを兼ね懇親会となった。山田二郎新会長をはじめ村木副会長、松田常務理事ら本部からの参加者も交え、また、谷口現吉名誉会員も顔を見せられ、旧交を深めた。

四日、今日も快晴である。

化粧柳の新芽が美しい梓川辺りのウエストン広場での準備は太陽が熱いくらいであった。それに比べレリーフの

ウエストン師は木かげに涼しそうである。

碑前祭の始まる頃には、道も通れないほどの人が集まっている。

第一部碑前祭は、十時から吉武正子信濃支部員の司会により始められた。赤羽信濃支部長の挨拶にはじまり、地元安曇村の小学生の献花、山田二郎会長の挨拶、献歌、それに細井澄子信濃支部員による尾崎喜八氏の一九六三年六月二日第一七回ウエストン祭に臨まれた時の詩「上高地での朝の感慨」の朗読があり、ウエストン師を偲んだ。

第二部記念講演は、本部の大塚博美評議員が総副隊長を務められた昨年五月の「チョモランマ／サガルマタ三国友好登山」成功の思い出などをご本人に話していただいた。この後、雪山讃歌を合唱し、一時間程で祭を閉じた。

（信濃支部　青木保良）

タンボチェ僧院 再建協力のお願い

会長　山田二郎

本年一月十九日、エベレスト街道の象徴として秀峰アマ・ダブラムを背景に壮麗な姿を誇っていたタンボチェ僧院が火災で消失いたしました。タンボチェ僧院はクンブ地方のチベット仏教の総本山として、敬虔なシェルパ族の信仰の中心地であり、聖地として崇められていました。

被災後、再建を願うヒラリー卿、タンボチェ僧院ヘッドラマ、N・T・ジャンボ師を長とする再建委員会、ハクパ・ノルブクムジュン村長、88年中国・日本・ネパール友好登山隊北側隊長パル・テンバ氏などから協力要請がなされておりました。

このたび本会も、日本山岳協会、日本ヒマラヤ協会、日本勤労者山岳連盟、日本ネパール協会などの諸団体と共に「タンボチェ僧院再建協力会」を設立し、一千万円の募金を目標額に各方面に協力を呼びかけることに決定いたしました。つきましては、会員諸兄姉のご芳志をお願いする次第であります。

募金振込先

銀行振込　協和銀行市ヶ谷支店　口座名儀「タンボチェ僧院再建協力会」　普通預金　口座番号　三六五四六六

飯野監事のご好意で、全国の協和銀行本支店からの送金は手数料が無料になっております。各窓口には、通達が廻っておりますが、混乱を避けるために、タンボチェの募金とお申し出下さい。また、振込証の氏名欄のところに会員番号を銘記して下さい。

郵便振替　口座名儀「タンボチェ僧院再建協力会」　振替口座　東京七―三〇六〇一

図書紹介

マンモスとの山旅

高橋由美子著

「マンモスとの山旅」という題名を見て何ごとか?と思って本を開けてみると、これは著者の〝マンモス〟という名の愛猫を連れて歩いた家族の山旅の思い出を記した随想集であった。

目次の次の頁に出てくる親子の写真を見ると、かつてのテレビドラマ「北の国から」をほうふつとさせるような一家と見受けられた。文章の中にただよう一家の山旅のムードも、この写真から受けるなごやかさが基調となっている。

「ヒトと猫が、いっしょに歩くなどというのは、常識に照らして考えれば、漫画的な世界に近いかもしれないし、ほとんど荒唐無けいとさえいえる情景かもしれない。しかし他人が珍奇に思えるようなこの山行形態を私達の家族はすっかり気に入ってしまったのである……」

という著者の猫を含めた、家族との暖い心情、山をはじめとする自然に対する素直な感情が、行間に満ち、著者のおおらかで、素晴らしい人柄を想起してくれるようである。

加えて本文の中には、理科年表からの引用が所々にあったり、地質、植生等自然科学への造けいの深さや、各地方の伝説をよく調べて書かれた文が披露されており、自然の事物に対する、真面目な洞察姿勢と、家族で五十座を歩き続けたタフネスに敬意を表したい。

しかしこれだけ著者の思い入れよろしく題名にまでしてもらった愛猫マンモスは現在失踪中で行方不明の由、著者の落たんのほどがしのばれるが、猫とは、人間にとってかくもつれない性（さが）を有する動物なのか……。

一九八八年十一月、岳（ヌプリ）書房刊B6版三〇七頁、二〇〇〇円

（小塩丘平）

THE HIMALAYAN JOURNAL 1986～1987

インドに本拠地を置くザ・ヒマラヤン・クラブが発行する広域のヒマラヤ

を中心にした会報である。毎年発行であるがAJやAAJに較べ七～八千㍍峰の報告と共にインド国内のヒマラヤについての記事が豊富で六千㍍峰が群立するまだまだ未知の山域が紹介されている。

一、一般登山報告。「Unknown Spiti」「A Return to Lingti」ではチベットに隣接するSpiti地方が紹介され一九八七年四十五日をかけ十五の河川を遡行し十一の峠に達し六千㍍峰六峰の内、五峰が初登頂といったうらやましい報告等二十編の登山報告あり。

二、Expedition and Notesインド国内を含む二十二の登山、遠征情報あり。

三、ヒマラヤ登山の大衆化と共に自然環境保護が問題になっているが、「Himalaya-On Fragile Heritage」と題した小論文あり。登山者の入山と政治的経済的開発が、造山活動上まだひ弱いヒマラヤの自然生態系をくずしている。

有名な「Chipko」と称せられる山岳住民の草ノ根運動がとりあげられている。今世紀の初めから芽ばえていたが、七十年代に森林を切られ山は丸裸となり日常生活の水とマキを求めて毎日遠くまで足を伸ばさねばならなくなった婦人達が、木にしがみついて伐採に反対し、ついに当局を動かした環境保護運動である。

長年月の自然界と人間のバランスのとれたヒマラヤの生態系を登山や開発で手をつけるには、"small is beautiful"の概念が全てを要約しているのではないかと結んでいる。

一九八八年刊、The Himalayan Club, P.O. Box 1905 Bombay, India, 二五八頁、一五〇ルピー

（南井英弘）

三水会

高尾山で懇親山行

四月九日高尾山で三水会〝春の懇親会〟が催された。前日の雨も上って花見客で賑わう清滝口を九時半出発。「三水会便り」には「小雨決行ケーブル駅前集合、城山にて昼食懇親会、各自昼食おさけ他豚汁用に水一リットル持参」とあったので少々気をゆるしての参加であったが矢張り歩く方が気持が良い。清々しい新緑の径を三十分も登ると、新宿池袋の高層ビル群が霞に烟って見えた。山頂の下を西へ廻りこんで折から桜満開の尾根路へ出た。

高尾山でのお花見は昭和五十七年の第百回記念高尾～陣場山行以来である。常連の沼倉さんの顔が見えないのが一寸寂しい。

尾根を来て一丁平花あかり

落花を浴びてのんびり登って居ると、先行していた幹事が迎えに来てくれた。たいした荷ではないが敬老の心が嬉しかった。十二時過ぎ城山へ全員到着。

既に幹事心尽しの豚汁も大鍋に煮立っていた。城山の辺りは余り桜がないのが残念だが、花より団子で早速乾杯、お酒盛りとなる。初夏を思わせる強い日差しに富士も道志も霞の中である。足下の相武国境を貫き出た高速路が描く曲線に続く相模湖の湖面の輝きが眩しいばかり。持参のアルコールも底をつき一時半を過ぎたので記念撮影の後、予定通り相模湖へ向かい千木良へ下山した。幹事の原、平戸、岩堀の諸氏に感謝致します。

参加者 荒木、岩堀、乾、入沢、大野、岡野、片岡、川上、菊地、河野、小林（碧）、斉藤（健）、斉藤（直）、高田、遠田、鳥居、橋本、原、平戸、平井、平野、吉武、横溝

（小林 碧）

岐阜・京都両支部

合同懇親登山

六月四日、岐阜・京都両支部合同の春季恒例懇親登山が、岐阜県本巣郡美山町の舟伏山（一〇四〇・三㍍）で行われた。

三日、同町神崎の清流荘で前夜祭。昨年の合同山行はあいにくの雨だったが、前夜祭のオミキがきいたのか、四日は快晴であった。三十度を越す暑さの中、ウグイス、カッコウの声を聞き、木陰に「二人静」のかれんな花を見ながら尾根道を登る。

二時間四十五分前後、全員頂上に到着。三角点を囲んでバンザイの後、ビールで乾杯。思い思いの場所で昼食をとりながら歓談。

下りは歩きながら大合唱になる。車止めでは、全員が輪になって手をつなぎ、「名残りはつきねど、つどいは果てぬ……」を歌って解散した。

来年は京都支部のお世話で石綴白周辺の山を予定しています。

乞うご期待！

〔参加者・順不同〕高木碕男、高木泰夫、斎藤惇生、井上治郎・悦子・まや・ゆき、四手井靖彦、木之下繁、行重陽子、高木志茂子、西川顕、河村章人・皆子、足立孝、岡田謙吉、大口瑛司、木村繁、久野菊子、神山敬三、佐藤正雄、高木ゆき、玉岡憲明、水野美代子、宮本十蔵、森本市郎、村田正春、山上晧一郎・昌子、高木敏朗、高橋達雄、林一美、日比野好春、溝脇昭人、

村瀬征二、（前夜祭のみ）松井辰弥

（佐藤正雄）

ナンガパルバットより

東京農大ナンガパルバット登山隊の準備、出発に際しましては、ご協力いただき誠にありがとうございました。

お蔭様で六月十八日B・Cに入り、いよいよ登山活動を開始いたしました。

長期間に亘り、理事会を留守にし、ご迷惑をおかけ致しますが、充実した山行をご報告できるよう努めてまいりますので、ご了承の程お願いいたします。（六月十九日付、BCにて）

（早坂敬二郎）

山田昇隊の遭難に対しI・M・Fのサリン氏より弔意

六月七日付、インド登山財団会長H・C・サリン氏より、山田昇他二名のマッキンリーにおける遭難事故に対し、インド登山界を代表して次の様な弔文が寄せられた。

× × ×

本年二月のマッキンリーにおける、山田昇他二名の日本人登山家の悲しい結末に対し、深く哀悼の意を表します。山田昇氏は、一九八四年の印日合同マンモストン・カンリの登頂者として知られておりますし、一九八六年には、マナリで開催されたヒマラヤ登山集会にも参加されたので、我々もよく知っています。

その後の彼の八千㍍峰での超人的活躍には目を見はるものがあり、三十八歳の若さでの死は惜しみて余りあるものがあります。

ここにインド登山財団ならびに、インドの登山界を代表し、深甚なる弔意を表する次第です。

会務報告

六月理事会

六月十五日　十八時三〇分～

場所　本会ルーム

出席者　山田会長、村木、藤平両副会長、松田、西村、山本、重広、織田沢、小林、入沢、穴田、小倉、関口、松本、伊丹、石橋、藤本、藤井の各理事、橋本評議員、太田、飯野両監事、（委任出席）早坂理事

議事

一、新会長挨拶

一、常務理事互選の件

村木副会長より、理事会の運営上必要な常務理事として機能分担上から次の四名を選任したい旨の説明があり、互選の結果原案通り承認可決した。

松田、西村、重広、山本

なお、常務理事会の構成は、正、副会長、常務理事四名に加えて、伊丹、藤井両理事も加えて運営することについても併せて承認した。

一、理事担当業務分担の件

松田（総務）
西村（財務）
重広（高所登山）
山本（図書）
早坂（学生部指導・青年懇談会）
小林（指導・遭難対策）
入沢（集会）
織田沢（資料・フィルム）
穴田（婦人懇談会）
小倉（出版―*山岳・会報）
関口（科学・医療）
松本（自然保護）
伊丹（高所登山・日山協・都岳連）
石橋（山岳研究所）
藤本（海外連絡）
藤井（総務）

＊山岳の具体的編集業務については大森評議員に分担してもらう。

なお各担当理事は、次回理事会迄に前任者からの引き継ぎを行ない新委員会の構成、具体的運営計画をまとめて欲しい旨の要望がなされた。

一、理事の責任と権限について

前理事会からの申し送りとして、新年度においては、第一回の理事会の席で、具体的に説明して欲しい旨の要望もあったので、民法第三十四条に基づいて設立された社団法人の性格ならびに問題点等につき、民法、文部省令による監督規定、定款、細則にもとづき、説明があり、併せて西村理事より、公益法人会計基準の概要説明、予算の枠と執行についての具体的問題点についての説明があった。

一、その他

各担当理事より、抱負ならびに、当面の要望事項等がのべられた後、次回からの定例理事会を毎月第二木曜日に開催することと決め、本日の議事を終了した。

（YM）

評議員会

日時　六月十九日（月）午後六時～

場所　新宿中村屋レザミ

出席者　山田会長、村木、藤平両副会長、広羽、小倉、大島、山野井、沢村、今西、吉村、大塚、橋本、河野、井上、の各評議員、松田理事、（委任出席）日下田、古市、杉野目、奥原、川上、室賀、大森

議事

一、新会長挨拶

一、常任評議員互選の件

定款第二十五条にもとづき、小倉評議員が議長となって、互選を行い、左記六名を常任評議員として選出した。

小倉董子、平林克敏、大森久雄、橋

本清、鳴原啓佑、大島輝夫

新旧役員交歓会

日時 六月十九日（月）六時三十分～

場所 新宿中村屋レザミ

出席者

（退任役員）岡沢祐吉、関塚貞亨、大橋晋、松永敏郎、浜口欣一、太田晃介

（退任評議員）越智英夫、宗実慶子、田中弘美

山田会長、村木、藤平両副会長、松田、西村、入沢、穴田、小倉、関口、松本、伊丹、石橋、藤井の各理事、飯野監事、広羽、小倉、大島、日下田、山野井、沢村、今西、吉村、大塚、奥原、河野、橋本、井上、大森の各評議員、杉山　以上38名

会は評議員会に引続き、定刻六時三十分に開会され、山田新会長より、退任される役員・評議員に対し、謝意が述べられた後、村木副会長の音頭で乾杯。引きつづき、会食、懇談に移り、楽しい一時を過した後、最後に記念品の贈呈、退任役員を代表しての今西前会長の挨拶をもって、定刻八時三十分、終始なごやかななかに閉会した。

（6月）

1日　婦懇委員会

12日　未来ビジョン検討会Ⅲ

15日　理事会
16日　図書委員会、フィルム委員会
21日　山研委員会、三水会
22日　資料委員会、科学委員会
26日　総務委員会
27日　自然保護委員会
28日　集会委講演会「石間信夫氏を囲んで」
　　6月来室者316名

会員異動　6月

改姓
牧谷　昇（九六四三）→直井　昇
小野　道男（九三二五）→高野　道男
小倉由美子（八〇四九）→飯坂由美子

退会
伊藤　潤治（七八三九）
吉村　比佐（八〇二七）
飯沼　敏男（九四七九）
西村　豊（八五六七）

☎ 234-6659
この電話でもお知らせしています

◉平成元年図書交換会

恒例の図書交換会を十月二十一日（土）午後二時より、本会ルームで行ないます。人に譲ってよい本をお持ちの方は当委員会へご連絡下さい。

図書委員会

◉科学研究委員会 シンポジウム（予告）

テーマ　「雨具」
場所　青山学院大学総合研究所ビル
日時　十月十五日午後一時半から

◉全国支部懇談会 山陰集会の案内

（山陰支部40周年）

このたび、山陰支部は創立40周年を迎えることになりました。つきましては、記念事業として左記の通り「'89伯耆大山の集い」を開催します。多数ご参集いただきますようご案内申し上げます。

記

期日　十月二十八日（土）～二十九日（日）
場所　懇親会・宿泊
米子市皆生「皆生グランドホテル」0859―33―3536
登山　伯耆大山（一七一一㍍）

なお、二十八日は「バスツアー（オプション）」「全国支部事務局担当者会議」「全国支部懇親会」も開催いたします。

会費　二万円、バスツアーは別途三千五百円
参加申込み締切　十月十日
参加申込み（用紙あり）および会費（現金書留）送付先
〒689―42鳥取県日野郡溝口町大倉884　篠原方　日本山岳会山陰支部全国大会宛

会費銀行振込の場合は左記へ
山陰合同銀行溝口支店　日本山岳会山陰支部全国大会　店コード099
普通預金口座2073841
その他お問い合わせは、〒682鳥取県倉吉市上井町1―222　井上豊重
TEL0858―26―5559

次代に残そう美しい山と渓

◉マライーニ氏の写真展開催

名誉会員フォスコ・マライーニ氏は日本での写真展「東洋への道」を開催を機に、去る七月十五日、夫人とともに来日した。

マライーニ氏およびこの写真展については、会報五二六号（一九八九年四月号）で杉本誠氏がくわしく紹介しているが、七月二十九日～八月二十日が愛知県豊田市、九月十一日から二十日までは、東京九段のイタリア文化会館で開かれる。その後、札幌その他でも開催が予定されている。

アイヌ、チベット、カラコルム、南イタリヤなど同氏のこれまでの足跡とフィールドワークの成果を一堂に展示。豊田市では二百数十点、東京は会場のスペースの都合で八十数点となるが、未発表作品も多く、見応えがある。

なお、写真の一部は「山岳」第八十四年号に収録・紹介の予定。

◉アフリカ横断旅行 隊員を募る

アメリカ山岳会々員で、登山・スキー・航海による七大陸すべての遠征経験を持つネッド、ギレット（四十四歳）を隊長として、アメリカ―アフリカ協会の後援で実施するグレート・サハラ冒険旅行隊へ参加できる日本人隊員一名を求めています。

条件は、強靭な体力と知能の持主であること。遠征中に経験を積むことに

なるので、砂漠旅行のエキスパートである必要はない由。ただ、日本国内でよく知られた人であることと、この遠征のスポンサーになるメジャ・ソース社の仕事に協力することです。

この、末踏のグレート・サハラ冒険旅行は総員十二名で、一九九〇年十一月大西洋岸を出発し、らくだを使ってモロッコ・アルジェリア・リビア・エジプトを横断、約三五〇〇マイルを六ケ月間で踏破、紅海沿岸に出るものですが、困難の度合は北極の横断、エベレストの登頂にも匹敵するとして、宇宙中継T・Vでその生のリポートを世界各地で放映し、国立地理学会誌にも記事を掲載する予定だそうです。

どなたか、この冒険旅行に参加しませんか。

以上の条件で興味と意欲をお持ちの方は、事務局に預けた資料で十分検討の上、隊長宛直接照会して下さい。

（六月来信のギレット隊長からの依頼状を紹介したものです。）

（松永敏郎）

◉還暦セーター頒布のお知らせ

従来一部の会員の間で胸にJACの文字とご本人の還暦年号を入れた赤いセーターを作り愛用されておりましたが、最近このセーターを作って欲しいというご要望が多くきかれますので左記により一括製作することに致しました。ご希望の方は事務局気付入澤まで。申込書送付申し上げます。

記

申込資格　還暦過ぎの会員
価　格　一万二千円
寸　法　S・M・L・
申込み締切日　九月二十日

（入澤郁夫）

◎自然保護全国集会 十月七日（土）～八日（日） 戸隠・越水ケ原で開催

「テーマ」一緒に歩いて
山の環境保全を考えよう

今年の自然保護全国集会は、山を歩き、自然の中で、山岳会と自然保護の関わり合いについて話し合います。

「山行計画」①と②

①黒姫山　六日（金）夜行発
　歩行九時間、健脚向き
②飯縄山　七日（土）朝発
　歩行五時間、一般向き
③現地集合の方は、七日（土）十五時から、もみの木山荘で受け付け開始。

①②③とも七日十七時までに集合して下さい。夕食後、懇親会を行ないます。

八日（日）
○早朝散索
○九時から集会
1、各支部の状況報告
2、自由討論「山岳会としての環境保全運動は、どうあるべきか」
3、昼食後、自由解散

宿泊予約のため、一般、支部とも、九月八日までに、日本山岳会事務局あて、ハガキで申し込んで下さい。山行参加希望者は、会員番号と、生年月日を明記すること。

会費一万円（一泊三食、懇親会費）申し込み者に、資料を郵送します。一般の会員の参加を歓迎します。

自然保護委員会

◉現地小集会・裏妙義山

集会委員会

紅葉を楽しみながら裏妙義の核心部にふれます。

集　合　十月二十三日（日）
信越本線　横川駅　午前八時四十分（JR特急あさま号上野七時発　横川八時三十八分着）

コース　横川駅―第二不動滝―丁須の頭―七人星―三方境―広河原

申込み　十月九日迄事務局へ

訂正　七月（五二九）号

○一頁下段14～16行　「法人と合わせ、約三億六〇〇〇万円に達した。このため」を「募金総額九七〇万円となり、スポンサー関係との精算の結果」に
○二頁一段19行　「西村晃」を「西村政晃」に
○二頁三段5行　「三国友好登山募金関係」を「三国友好登山隊関係」に
○二頁三段10行　「七〇〇〇万円を預り金として処理」を「七〇〇〇万円で処理」に
○九頁新入会員紹介欄の上から22人目、似島一彦(63)とあるのを(50)にそれぞれご訂正をお願いいたします。

平成元年八月二十日
102 東京都千代田区四番町五―四 サンビュウハイツ四番町
発行所　社団法人　日本山岳会
発行者　山田二郎
編集代表　小倉厚
電話東京（261）四四三三
振替口座　東京三―四八二九番
東京都港区赤坂一―三―六 赤坂グレースビル
印刷所　株式会社　技報堂